

# アトリエ 琉游舎 だより 137号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)  
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2022年8月10日発行

## 晩夏 晚霞 挽歌 蕃茄

- いずれも「ばんか」と読みます。今回は「ばんか」という音の響きに誘われてしまいました。
- 「晩」という文字は夕暮れや夜、時節の遅いことを表す漢字です。「晩夏」は夏の終りです。お盆前後から吹く風で涼しくなる時節です。「晚霞」は夕方に立つ夕がすみのこと。空や遠景がぼんやりと見える夕景です。時や節が変わって行く姿が霞に漂い見えてくるようです。
- 挽歌は死者を哀悼する歌として万葉集の時代から盛んに詠まれたものです。「挽」は引くと言う意味です。中国で棺を引きながら歌った歌が挽歌の起源のようです。葬儀において死者の魂を呼び戻したりなだめるために詠んだ歌で、呪的な意味合いがあったと考えられます。
- 「紅くして 黒き晩夏の 日が沈む」山口誓子の句です。暗くなるのが早くなった晩夏の頃、暗い空を赤くしながら日が沈んでいく情景を表現したものです。暗い空の雲に、地平線の下に沈んだ太陽の光が反射して真っ赤に染まっています。77年前の晩夏15日も、こんな夕暮れだったに違いありません。晩夏は挽歌の時です。そして終わりから始まりへと向かう時です。
- 今年もまた晩夏15日がやって来ます。この日は戦争を遂行したものにとっては敗戦の日です。しかし戦争に否応なく巻き込まれた人達にとっては戦争の終結に安堵した終戦の日です。ある人にとっては敗戦を悲しみ自失となった日、ある人にとっては終戦を喜び未来が開けた日。77年前の日本人にとって、晩夏15日は終戦か敗戦かどちらの日だったのでしょうか。77年前の晩夏から始まった戦後の日本は、2022年の今、ある始まりのための終わりを迎えようとしているのか、それとも終わることが出来ないまま挽歌に見送られているのか、どちらでしょう。
- 「蕃」は生い茂る。異国の意味。「茄」はなすび。「蕃茄」は赤なすび、トマトのことです。真っ赤にたわわに実ったトマトは夏の生命力の輝き。そしていつの時代も蕃茄は真っ赤です。

木 金 土 日

### 8・9月スケジュール

月 火 水

11	12	13	14
映画会 お休み			お盆施餓鬼法要 10時半
15	16	17	18
			映画会 13時半
22	23	24	25
			休舎
29	30	31	9月1日
	読書会 13時半		映画会 お休み
5	6	7	8
			映画会 13時半
12	13	14	15
	読書会 13時半		映画会 お休み

お盆施餓鬼法要  
8月14日(日)  
10時半

写経会  
9月4日(日)  
13時半

読書会  
8月30日(火)  
9月13日(火)  
13時半

映画会  
不定期の開催  
となりご迷惑をおかけします

今年の夏はいつもの夏と違うという言葉、ここ数年は毎年のように呟いているような気がします。それでも2022年、今年の夏はいつもにましていつもの夏と違うと書いても間違いではなさそうです。今年は6月下旬から7月初旬にかけて一回目の猛暑がやって来ました。異常に早い梅雨明けです。日照りが続き、水不足が心配され、私の畑も例年を遥かに上回る35度前後の気温に作物はくたびれ果て、毎日の水やりも追いつかず、成長が止まってしまいました。畑を食い散らかす虫たちも暑さで、なりを潜めたままでした。ところが一転、梅雨が舞い戻ったかのような蒸し暑い雨の日が始まりました。畑の水やりも必要なくなり、作物もぐんぐん生長していきます。日照も大切ですが、生きものに必要なものは水であることがよく分かります。雑草たちが生長を競うかのように畑全面を覆い隠します。雨中の草取りを怠っているうちに、また猛暑が戻って来ました。畑は雑草を住み家とし、作物を食料とする蜂やバッタや様々な虫たちの天国と化しました。私にとってはこれは地獄の責め苦です。彼らには気の毒でしたが、炎天下、三日かけて畑の雑草を全て抜き去り、虫たちの住み家を破壊し、やっと作物のための畑を取り戻しました。それからは食べ切れないほどの胡瓜、茄子、ピーマン、トマトの収穫です。結局紆余曲折はあったものの作物はいつもの夏と変わらない実りの夏です。あれこれあっても喉元過ぎれば熱さを忘れる、今年もそんないつもの暑い夏が終盤に入りました。

いつもと違うことを違ふと観ること、そしてその違ひを毎日の関わりの中でいつもと同じと観ることができ、これが私が狂言綺語で書き綴っている「ありのままに観てありのままに行う」と言うことです。仏教の思考方法は西洋の論理思考が身につけてしまった私たちにはとても言葉で説明し難く、また理解し難いものです。仏教用語である「諸法の実相」や「一如」や「空」は全部同じことをいっているのですが、実感として私たちの心身に直接語りかける言葉にはなりません。私は仏教書を渉猟していただけた頃はこの言葉が出ると、そこを読み飛ばしていました。机上の言葉にしか過ぎないそれらは私に何の行動も促すことがなく、現実の生活の後追いに留まっていることが分かったからです。それからの私の読書は、日々の信行生活を後から確認するためだけとなり、その時間を経の読誦と日常をありのままに生活することに充てました。すると般若心経の「色即是空 空即是色」や法華経の「諸法実相 所謂諸法 如是相 云々」の言葉が「信」となり、自ずから「行」へと続く道が立ち現れたのです。今日は何をしようか、何をしなければならぬ、というような思案は全く不要です。毎朝ただ頭を空っぽにして経を唱えるだけの私は、その空っぽの頭のままだに日々の生活へと導かれて行くのです。この毎日続けて6年、今年もいつもと変わらない暑い夏です。

冒頭の今年の私の夏は「ありのままに観てありのままに行う」日々を具体的に書いたものです。今年は確かにいつもの夏と違い、猛暑が6月にやってきて梅雨と猛暑を繰り返し、今この文を書いている8月7日は3回目の梅雨の最中です。季節が段階的に変化していくことがいつもの季節変化ならば、今年の夏は明かにいつもと違う夏です。行ったり来たり繰り返す、いつ梅雨が明け夏が終わるのか見当が付きませんが、おそらく気づけば秋となっていることでしょう。人間はエアコンで暑さをしのぎ、ダムが水量を調節して何とか夏を乗り切っていますが、自然の生き物も右往左往する天候に見事に対応する能力は備えていました。人から見ると、いつもの時期にいつもの作物の成長や虫の出現が見られなかったのですからいつもと違う夏なのですが、それでも気が付けば、数や量や成長速度や出現時期の違いはあっても、確かに実はなり蜂は花の間を飛び回り、馴染みの虫たちが作物の幹や葉っぱに寄生しています。これはいつもと変わらない夏です。私のこの夏の生活が仏教の教えとどこが関係あるのか、畑と人のある夏の出来事に過ぎないのではないかと疑問を持たれるかもしれません。宗教に何か救いを求め利益を求めるのであれば、それは前回述べたように宗教ではなく取引です。私の宗教は毎日を心安らかに当たり前に生きることにあります。私が信ずる教えはありのままに観てありのままに行えば安らかな毎日を送ることが出来るということ以外にはないのです。違いを嘆きその違いを解消することに力を注ぐのではなく、違いを受け入れその違いとともに歩み続けられれば、いずれその違いは互いの中で同化していくのです。今年の夏と私と自然の生き物の関係を言葉に表すとこのようなことでしょう。それが宇宙の真理、仏の導き、大いなるものに抱かれて日々を送ることなのです。

私のありきたりの日常を安らかに過ごすことが私の宗教ならば、あなたの日常を安らかに過ごすためにはあなたの宗教があつてしかるべきです。お釈迦様の教えは導きの灯（法灯明）です。あなたの宗教はあなたの日常を生きるあなた自身の中にあります。それが自灯明です。各々が自灯明を足元にかざしながら法灯明の導く所に歩いていくことが、私のあなたの各々の宗教（信行・日常）です。ですからあなたにもいつもと違う夏がありいつもと同じ夏があるはずです。その夏をありのままに受け入れていることが、あなたが安らぎの処へと歩む道に在ることです。宗教は誰のものでもなくひとりひとりに唯一無二のものなのです。

いつもの夏と違ふと観て、未だにそれが私の中で同じ夏と同化できていないことが2点あります。一つはへびを全く見かけないことです。毎年連休明けから7月ころまで蓮池と山の間を行ったり来たりするへびがその途中で車に引かれて死骸を晒したり、慌ててシュルシュルと音を立てて逃げ去る姿を、毎日のように目撃したものです。その間携帯蚊取り線香は必需品でした。しかし今年の夏は一度もへびに  
お目にかかることもなく、蚊にもほとんど刺されることもありません。へび  
お問い合わせ：0287-53-7848 08033508152  
に出会わないことも蚊に刺されないことも有難いことなのですが、この  
矢板市大槻2319-17グリーン矢板C-850  
2点だけいつもと違ふまま夏を終えてしまうのは、少し心残りかもしれません。メール：toi10lizuru@outlook.jp